

馬塚

昔、東浦一体の海辺の村では塩を作っていた。あげ浜といって砂を敷いた池に湖水を汲み上げ太陽の熱で水分を蒸発させて濃度の濃い湖水をカマで煮つめて塩を作るのであるが燃料のバキがたくさん入用であった。

自分の山の木を切り尽くして他人の山の木も同じようになくなって困った村人は代官の山に大きな木は生えているのを見て、「皆で塩を作るためだから切らせてくれ」と代官に頼みに行ったが断られた。そこである夜ひそかに代官の山に登って木を切り塩作りの小屋に運び込んだ。あとで代官はたくさんの切株を見つけ

「誰だ、おれ様の山の木を切った者は名乗れ」とおそろしい剣幕で刃を抜いて村人をおどし皆を震え上がらせた。

村人全部の首をはねられるような気配になって来たとき「私が一人で切りました」と名乗りでた者がいた。

それは馬野彦右エ門であった。彦右エ門は働き者で皆から好かれていた。このままでは村人みんなが殺されてしまうと思い一人で罪をかぶって名乗り出たのである。

村人の見ている前で彦右エ門は首をはねられてしまった。

飛び散った血の中へ倒れた彦右エ門にみんなは心の中で手を合せ涙をこらえて泣いた。

彦右エ門は罪人として扱われ墓も建てられなかった。

そこで村人は道傍の石をお墓の代りにそれとなく拝むことにした。代官に見つからないようにその石に水をかけたり花を供えたり、その前を通るたびに手を合わせ心から感謝した。その石は今も残っている、咲き乱れる野菊の花に埋もれてその石はいつの頃からか「馬塚」とよばれるようになった。

「郷土誌 阿曾」より抜粋